

## 第1章

道可道，非常道。名可名，非常名。无名，天地之始；有名，万物之母。故常无欲，以观其妙；常有欲，以观其徼。此两者，同出而异名。同谓之玄，玄之又玄，众妙之门。

道の道（い）うべきは常の道にはあらず。名の名づくべきは常の名にはあらず。無は天地の始めと名づくべく、有は万物の母と名づくべきなり。故に、常無にして以てその妙を觀んと欲し、常有にして以てその徼を觀んと欲せよ。この両者は同じきも、出でては名を異にするなり。同なるこれを玄と謂うも、玄のまた玄にして、衆妙の門なり。

### 釈義

「道可道，非常道。名可名，非常名。（道の道うべきは常の道にはあらず。名の名づくべきは常の名にはあらず）」。道は、形もなく姿もなく、心も欲望もなく、色も味もなく、どこにでも遍在し、実体も名前もない。それは凝縮されており、陰と陽は判断されず、天地は分かれておらず、混沌としている。いかなる意志や力にも影響されず、継続的かつ自然に動き、目に見えないところで宇宙や世界の形成、世界のあらゆるものの生成、万物の変化を促しているのが道である。道は、宇宙の根源であり、天地の始まり、造化の枢機卿、物質の世界を支配するものである。道は、万事万物発展の全体的な法則であるだけでなく、宇宙万物の起源そのものでもある。

言葉で表す「道」は永遠の道ではない。永遠の道とは、「非常道」であり、形而上学的には理解できないのである。それも言葉では言い表せないのである。言語で表現されているのは「可道」であり、道そのものではない。「可道」とは、道の動きと変化、道の存在とその機能と効果を指し、

それによってさまざまな実践的で具体的な方法、アプローチ、規則、法則が生み出されるのである。「可道」の形成には、万物の成長と衰退、若さと老年、生と死、因果などが含まれる。したがって、言語で表現された「可道」は、道の存在そのものではない。

道によって提示された名無しから名有りへの存在論的差異に基づいて、さらに「可道」と「常道」を通して、「名」の「可名」と「常名」の道理が説明される。道は本来名が無く、天地より先に生まれたのが原点であり、かろうじて言葉で表される「名」は永遠に存在する名ではなく、偽りの代わりに言う名であるため、「常名」ではない。

道が形成され、名も付けられるようになった。言葉で表現される道や名は、もはや本来の面目ではなくなった。無は天地の始まりであり、万物を生み、万物を育み、母として存在する。『道德経』第40章「天下万物生于有，有生于无。（天下万物は有より生じ、有は無より生ず）」。つまり、有と無は相互依存しており、動と静がある。第21章「道之为物，惟恍惟惚。惚兮恍兮，其中有象；恍兮惚兮，其中有物；窈兮冥兮，其中有精。其精甚真，其中有信。（道の物たる、これ恍たりこれ惚たり。惚兮たり恍兮たるも、その中に象有り。恍兮たり惚兮たるも、その中に物有り。窈兮たり冥兮たるも、その中に精有り）」。このことから、道が象、物、精、真、信を生み出すことが分かる。無と有、無は宇宙の起源であり、始まりであり、母である。有は世界のすべてのものの運動と成長の法則であり、それらは同じ起源を持っているが、名が異なる。

道について「无名，天地之始；有名，万物之母。（無は天地の始めと名づくべく、有は万物の母と名づくべきなり）」（第1章）と「其上不皦，其下不昧，绳绳不可名。（その上皦かならず。その下は昧かならず。绳绳兮として名づくべからず）」（第14章）で語っている。それでは、道はどのようにしてその名を得たのだろうか？ 道教の祖である老子は、『清静経』の中で次のように述べている。

「大道无形，生育天地；大道无情，运行日月；大道无名，长养万物；吾不知其名，强名曰道。（大道には形なく、天地を生み育つ、大道には情なく、日月を運行する。大道には名なく、万物を生み育つ。吾その名を知ら

ず、強いて道と言う)』。

換言すれば、道は形も姿もなく、天地より先に生みだされた。道は衆母の母である。「吾不知谁之子，象帝之先。（吾は誰の子たるかを知らず。帝の先に象たり）」（第4章）。誰がそれに名前を付けることができるか？それで、仕方なくそれに名前を付けるしかなく、「道」と名付けたので、「无名，天地之始。（無は天地の始めと名づくべく）」と言われた。道は本来無限であり、無極が動くことで太極が生まれ、太極が生まれて陰陽が分かれ、陰と陽が分かれて天地が定まるのである。天地が定まって万物が存在するようになり、これが「道生一，一生二，二生三，三生万物。（道は一を生じ、一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず）」（第42章）である。人は万物にその機能に応じて名前を付け、万物が何かに属するようになる。例えば、天と地、太陽と月、寒さと暑さ、男性と女性などの名前である。また、例えば、生と死、善と悪、名誉と恥辱、損と得などの名詞である。それが物理的な道具の名前であれ、形而上学的な道の名前であれ、それらは道の陰陽の機能の名前にすぎない。それで、「有名，万物之母（有は万物の母と名づくべきなり）」と言われる。

「故常无欲，以观其妙；常有欲，以观其徼。此两者，同出而异名。同谓之玄，玄之又玄，众妙之门。（故に、常無にして以てその妙を觀んと欲し、常有にして以てその徼を觀んと欲せよ。この両者は同じきも、出でては名を異にするなり。同なるこれを玄と謂うも、玄のまた玄にして、衆妙の門なり)」。道を修行する道士から言えば、この句は動静の過程かあるいは一種の精神の境界を指している。「常に無く」とは天地未だ始まらず、万物が静まりかえることの象徴である。常に無しの境界の時、最も原始的で、最も素朴で、最も真実の状態に回帰すること、それによって道の本源に接近することができ、事物の本来の面目を観察することができる。常に無私無欲であってこそ初めて道の玄を悟ることができ、その妙の境地に到達でき、無の中から妙の有が生まれる。「常有欲，以观其徼。（常有にして以てその徼を觀んと欲せよ）」とは、人が主体的な意識を持っていれば、万事万物の成長や変化を観察することができる道を指す。これを「徼」という。

「観」、「妙」、「微」の3つの単語に焦点を当てて説明しよう。『道德経』では一つ一つの言葉は大切に、一つという言葉に三つの奥義があり、そのすべてが非常に正確であり、決して恣意的なものではない。この章においては二文字の「観」でこの観点を反映していると考えられる。同じ「看」の意味は「観、察、窺、看、視、睹」などのさまざまな言葉で表現できる。ここでは他の言葉の代わりに「観」という単語が使われていることに大きな意味がある。「観」は通常の観察の意味以外に、さらに二重の固有の意味概要がある。それは「総覧」と「内観」である。「総覧」は「観」であり、反対語は注意深く観察するという意味の「察」である。「察」は細かく観察する意味である。また、「内観」は中を見ることを意味し、対応する単語は「視」である。「視」は外を見ることを意味する。それでは、「内観」はその内側の何を見るのだろうか？それは物を見るのではなく、心を見つめるのだ。「内心を観照する」とも言う。「視」と「察」という二つの単語は『道德経』にも出ており、原文を見たらすぐ理解できる。「視之不見名曰夷（これを視れども見えず、名づけて夷と曰う）」（第14章）とある。この「視」は一般的な観察を意味する。「俗人察察，我独悶悶。（俗人はみな察察たるも、我は独り悶悶たり）」（第20章）の「察」は注意深く見るという意味である。つまり、第1章の「観之妙（その妙を観ん）」と「観之微（その微を観ん）」とは注意深く事物の本質と事物のすべてを俯瞰して把握するという意味であり、一般的な観察という意味ではない。「妙」という言葉と「微」という言葉について話そう。「妙」は絶妙で微妙という意味で、物事はまだ起こっておらず、まだ行動を起こしていない、芽が出ようとしている状態を表す。「微」は交合、または境界という意味があり、物事がすでに起こったり、活動したり、発展している状態を表す。したがって、「無」は「妙」に対応し、「有」は「微」に対応する。

このことから、修行する人は道の存在を悟るとき、無と有（つまり、陰と陽）の共存と相生の原理を理解しなければならず、二つの具体的な方法を習得して、あらゆるものにおける道の応用を理解しなければならない。つまり、常に物事が隠され、目に見えない初期の段階で、名もない、姿のないものを通して、物事の最初の芽の動きを注意深く観察する。ま

た、常に物事の発展がはっきり見える段階において、名があり、姿があることを通じて将来の発展傾向を観察する。これこそ「常无欲，以观其妙；常有欲，以观其微。（常無にして以てその妙を觀んと欲し、常有にして以てその微を觀んと欲せよ）」と呼ばれるものである。

この種の「无中观妙有，有中观未有。（無の中に妙を観察し、有の中にいまだ有なしを觀る。）」の方法を把握することで、万事万物の生長と造化の道を悟ることができるようになる。だからこそ、無と有は、一つは道の本体で、一つは道の作用なのである。この二つを玄という。玄は道の別名にすぎず、有と無が相生まれてできることを指している。水は永遠に止まらず、造化することを「玄之又玄（玄のまた玄）」と呼ぶ。これこそ天下の万事万物の「众妙之门（衆妙の門）」である。